

初めての「教え子」の『古稀祝い』

2019年6月30日～7月1日

於 札幌「ジャスマックプラザホテル」

昨年、札幌での「教え子」との「古希祝」に参加した翌日、2019年7月2日の「きむせん雑感」で、5回にわたって二日間にわたる出来事を掲載させてもらった。以下、画像なども入れながら再度の編集を試みた。

水無月から文月へと、月を跨いでの「風連中学校第18期生 古希を祝う 同期会」に参加し、昨日、午後二時過ぎに旭川に戻ってきた。▼昭和38年（1964年）学芸大学旭川分校を卒業後に赴任した風連町立風連中学校（現在は、名寄市立風連中学校）の二学年担任として受け持った、初めての教え子たちの卒業54年後の『古稀祝い』も兼ねての「同期会」は、6月30日、午後5時から札幌の「ジャスマックプラザホテル」で開催された。前回の層雲峡「ホテル大雪」での実施から二年を経ての今回の「集い」は、この時に計画されたものであった。▼30日、カミさんと9時過ぎ、愛車の中古「てんとう虫マーチ」で、我が家をスタートした。（カミさんは、小生とも共通の大学時代の友達で、現在も家族同様に交流している女性が札幌・菊水に住んでいるので、久しぶりに泊めてもらって翌日一緒に帰ることにした）高速は利用せず、12号線、275号線を走行して予定通りの正午過ぎに友達宅に到着し、小休止を取ってから小生はジャスマックホテルへと向かった。初めてのホテルだったが、ナビの指示を基準にして進むこと20分弱でホテルに到着した。駐車場に入れる際、入り口がはっきりせず少々手間取ったが、大きな時間ロスもなくホテルのフロントの前に立ったのは、13時過ぎであった。札幌在住の幹事からは少し早めに会場入りをするこ



ルで確認していたが、会場の準備は14時過ぎからで、宿泊の部屋にもまだ入ることができない…と、フロントの人の話であった。ロビーのソファで待たせてもらうことにして、フロントに対面する位置にある席に座って、一息ついてた。▼小生が、早めの時間にホテル着となったのには、理由があった。幹事の一人から、小生自筆の短歌四首を会場に表示するので持参してほしい…と依頼されていたからである。ややあって、座っている席から右側の少し奥まった場所に長机が置かれた傍らで、白髪の男性と小柄な女性が話しているのが目に留まった。目を凝らしてみると、札幌在

住の幹事となっている二人である。そっと近づいて「やあー」と声を掛けると、一瞬の間があつてから二人の顔がほころんだ。小生が、こんなにも早く着いているとは思ひもしなかったのであろう…。その後は、二年余を経てからの再会の挨拶を交わし、その後合流した他の幹事の「教え子」と、会場となっている四階へと向かった。そして、ホテルの係りの人に話して、設営に加わらせてもらった。やがて14時少し前に、札幌在住の幹事の要望も入れた会場設営が終了した。参会者の受付をする一階ロビーに降りる直前に、設営に当たった幹事三名と一緒に、ホテルの人をお願いして、恥ずかしながら自筆の歌をバックに、スマホ撮影をした次第である。

一階ロビーに降りてみると、幹事長の佐藤勝君の車に同乗して札幌に来た三上先生を含む風連勢も到着していて、ロビーには同期会参加者の懐かしい顔が多く見られた。受付を終えた参加者がいくつかのグループに分かれて、再会の喜びに浸っている。そこには、何とも表現し難い温かい時間が流れていた。▼小生は、桑原隆太郎君と同室と聞いたので、部屋の確認も兼ねて9階の910号室へと桑原君と向かった。先導してもらいながら部屋へ入り、ベッドは桑原君の配慮で、窓側ということになった。その後、幹事でもあった桑原君は、参加者の対応もあるので一階ロビーへと戻っていった。▼小生は、簡単に荷物を整理し、着替え等予定されている「三次会」まで部屋に戻らな



風連中学校第18回卒業生古希同期会 令和元年6月30日 於 ジャスマックプラザホテル

くても済む準備をしてから、一階ロビーへと降りて行った。時間は既に17時に近く、ロビー内は他にも「同期会」が二件あるとのことで、騒然とした感じであった。▼そんな中で、予定の17時となったが、未だ会場に姿を現さない参加者が4名いた。しかし、集合写真を一次会終了までに参加者に渡すためには時間的にはリミットということで、ロビーに設けられた撮影場所で撮ることになった。そして、記念すべき「卒業55年目の古稀同期会」の集合写真撮影が、無事に終了した。その後で、少し前に幹事諸君も加わって設定した四階の「一次会会場」へと、三々五々向かった次第であった。

一次会は、予定よりも 10 分程の遅れで始まった。一次会の進行役は井馬勝馬君、二次会は大宮幹雄君ということで事前の打ち合わせで決まっていた。井馬君の「開会宣言」の後、物故者への黙



祷（名簿での確認では、当時学年や教科で関わった教員では 21 名中 10 名、生徒 222 名中 25 名が該当。実際には、教員は半数以上、生徒では 1 割以上が鬼籍に入ったと考えられる）、次に、配布された「しおり」にある歌詞を目で追いながら、55 年前は空で覚えていた

校歌を歌った。声も不揃いでおぼつかない斉唱ではあったが、どの顔にも笑いと満足感が溢れていた。▼次いで、本会の幹事を代表して、佐藤 勝君からの言葉…。前回の「層雲峡」から 2 年振りの再会を嬉しく思います。1949 年生まれの我々が、中学卒業 55 年後に札幌で会えるとは奇跡的なことです。そんな中、出席率 100% の先生、そして本会開催に向けて尽力した札幌在住の同期、また「しおり」等の作成に努めた風連の同期に感謝します。2 年振り、また 55 年振りの人もいるかもしれませんが、どうか今回の再会を楽しんでほしい…と思います。また、過去に好きだった相手がいれば、そんな思い出を語り合うのもいいのではないのでしょうか…?!



▼次いで、挨拶に立った先輩・三上仁先生からは、次のような言葉をいただいた。

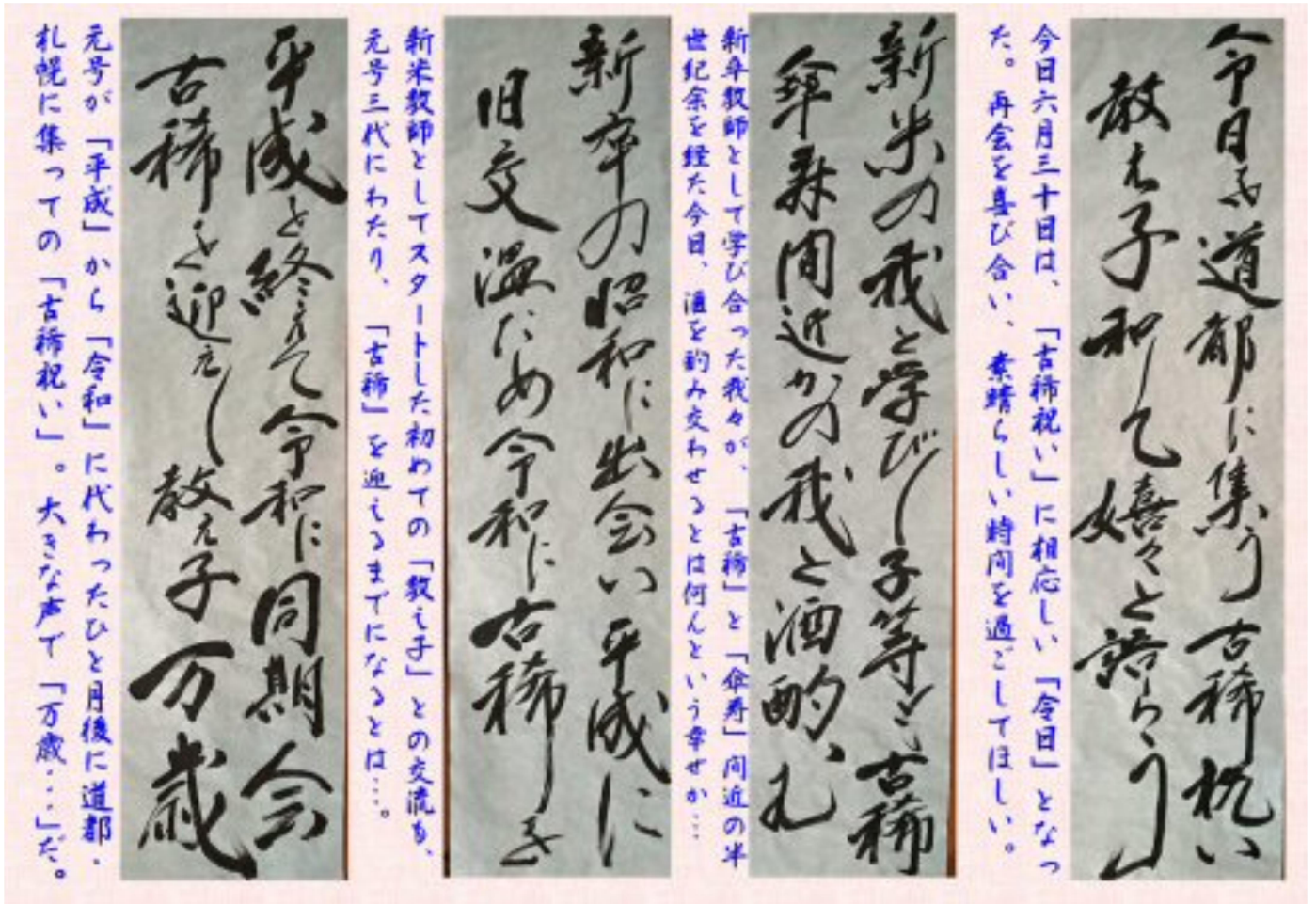
- ・ 6 月 23 日に掲載された道新コラム『北極星』の桑原隆太郎君の「同期会二つ」が、正に、参加したみんなの思いを代弁していると思う。
- ・ 90 歳を目前に記された、ノートルダム清心学園理事長の故・渡辺和子さんの「価値があるから生きている

のではない。生きているから価値がある。」という一節が重く感じられる。

・ 風連中学校の思い出としては、校舎全焼という出来事を通して、協力し合う生活がいかに大切であるかを実感し、また、恵まれない環境で心を一つにして優勝を勝ち取ったバスケット部の頑張りが強く記憶されている。

等の、半世紀以上の出来事に思いを馳せ、耳を傾けている参会者の心に響く言葉を聞かせていただいた次第である。

先輩・三上先生の挨拶に次いで、小生も話をさせてもらった。▼まず、これまでの8回余に及ぶ「同期会」には毎回声掛けをしてもらったことへの感謝を述べさせてもらった。加えて、何時の頃



からか、教師としてではなく、「18期生」の一人として参加している…との思いが強くなっているとの心境を、率直に伝えさせてもらった。▼次に、新卒教師として初めて関わった「教え子」の「古稀祝い」であることへの思いを、四首の短歌として詠み「半切紙」に書かせてもらったが、それぞれの歌について直接解説を加えさせてもらった。

● 今日を 道都に集う「古稀祝い」 教え子和して 嬉々と語らう

元号が「令和」に代わってから二ヶ月余、道都・札幌の地に、同期 40 名余が集った。6 月 30 日は、正に「今日」（よい日、めでたい日、吉日）そのものである。そんな日に、同期が再会を喜び合い、和やかな語り合いながら素晴らしい「令和」の時間を過ごしたい…との思いである。

● 新米の 我と学びし子等も古稀 傘寿間近の我と酒酌む

立場は異なれど、一緒の土俵で学び合った新卒の小生と、生徒であった「18期生」…。かたや「古稀」、かたや「傘寿」間近の半世紀余を経て、高齢者とも呼ばれる年代となって共に酒を酌み交わし、語り合える日を迎えられるとは、何んという幸せなことか…!!

● 新卒の 昭和に出会い 平成に旧交温め 令和に「古稀」を

新米教師として昭和 38 年に出会った「18期生」との交流も、平成・令和に至る三代の元号を数えることとなった。そんな令和の「令き日」、「18期生」の「古稀祝い」をしているのだ…!!

● 平成を終えて令和に同期会 古希を迎えし教え子 万歳

昭和に出会って、平成では8回余の「同期会」で旧交を温め、令和の今日は、節目の「古稀祝い」を楽しんでいる。この「今日」に、大きな声で万歳…!!だ。

次いで、司会の井馬君から指名されたのは西野清一君で、役割は「乾杯」であった。「お久しぶりです…!!」との発声の後、次のような挨拶を述べた。

・ お二人の先生の話の伺いながら、我々が「古稀」を迎えたことを夢のように感じています。

・ 同期に物故者も多数おり、美空ひばり・石原裕次郎、そして、マイケルジャクソンも50代で亡くなっています。しかし、我々は70代を迎えて、この地にいます。

・ 三上先生は「米寿」を迎えておりますが、我々も、それを目標に頑張りましょう。

西野君は、長寿社会ではあっても、同期や著名人と言われる人でも50代で亡くなる人がいる中、節目の「古稀」を迎えることができた幸せを感じながら、次は、三上先生が迎えている「米寿」を目指すことを同期に呼び掛け、最後に・ 『皆様のご多幸を願って、「乾杯!!・・・』と、声



高らかに結んだのでした。そして、乾杯の後は、セレモニーでの多少の緊張感から放たれて、乾杯の延長での飲食が暫く続いた。それが過ぎると、席を移動するなどして久し振りに再会を果たした同期との懐かしくも楽しい会話が弾み、「古希を祝う同期会」は、一段と熱気を帯びたのであった。

17時過ぎから19時半過ぎまで続いた「一次会」…。アメリカ国籍を取得して、ご主人と一緒に「同期会」に合わせる形で来日し、九州から北海道・稚内までの日本縦断を実行した青山つや子君からの話は、多くの同期とは異なる人生を歩みながら「古稀」を迎えた生き方として、実に興味深



く、参会者の心に浸透したと思う。「二次会」の会場にはご主人も同席し、妻が55年前に共に過ごした同期との交流を図るといふ、素晴らしい場面が展開されたのであった。▼2時間余の「一次会」が進む中、参会の同期は思い思いの人や席で語らい、過ぎ去った時間を埋めながら、現在の自身を見つめ直していたのか…と、思ったりした。が、直後に、それを最も強く感じたのは小生自身かもしれない…と苦笑し

てしまったことであつた。▼やがて、「一次会」も終わりに近づき、♫は夫婦で参加の渡辺泰邦君(奥さんは黒沢 葉君)が指名された。「仕事も終わり、気ままな生活を送っていますが、健康には注意して過ごそうと思っています…」と言いながら、



「一次会」を「…風中第18期生同期会、…万歳!!」との力強い「中♫」をしてくれた。その後、二次会の会場に向かう前に、集合写真撮影時に3名が間に合わなかった…とのことで、再度、全員の写真撮影をしてから、「二次会」へと向かった。▼「二次会」は、2階のカラオケ設備のある部屋へ場所を移して、司会役は大宮幹雄君に代わって行われた。「一次会」から持ち込んだ飲み物・食べ物を口に運びながら、歌あり対話ありの無礼講の時間が過ぎていった。やがて、21時半も近くなり、帰る人もいるので「二次会」も♫の時間を迎え、時間の許す

人は次なる[三次会]へ…。ここで、「二次会」の♫は、沖縄に居住し、2年前も参加した小室和子君が指名された。「皆さんと過ごせたことを感謝しています。これからも健康で、再会できますことを期待しています。ありがとうございました。」との言葉で、「二次会」を♫てくれた。▼20時頃から始まった「三次会」は、宿泊する部屋がある9階の幹事室の923号室であつた。ダブルルームの広さしかない部屋に20名余がひしめき合うようにしながら語り合い、笑い合う様は、「古稀」を迎えた爺さん婆さんとは思えないほどエネルギッシュな有様であつた。





6月・水無月から7月・文月に月が改まる直前に部屋に戻り、記念すべき「古稀」を迎えた教え子との時間も過去のものとなってしまった…との思いを強くした。▼翌7月1日、三々五々朝食を済ませた後、ロビーでの「別れのひと時」が…。前夜、次回の「同期会」は、二年後に「びふか温泉」でまた会おう…と決まったことを、それぞれが確かめ合うように「別れの挨拶」としていた。小生も、10時

少し前、ジャスマックプラザホテルの正面玄関前で、車に乗っての見送りを受けて、カミさんが待



つ菊水上町へとスタートした。小生の「人生での大きな宝物」として、記憶と記録に残るであろう「古希を祝う同期会」での時間を、心に刻み込みながらの走行となった次第である。

小生にとっては「人生の宝物」にも等しい、教職に就いて最初に学んだ「教え子」と記念すべき「古希を」祝うことができた一年前を思い出し、記憶を更に鮮明にしておきたい…との思いで今回の編集を試みた次第です。